



Data

監督・脚本：黒沢清
 原作：前川知大『散歩する侵略者』
 出演：長澤まさみ／松田龍平／高杉真宙／恒松祐里／前田敦子／満島真之介／児嶋一哉／光石研／東出昌大／小泉今日子／笹野高史／長谷川博己

👁️👁️ みどころ

日本の巨匠、黒沢清監督が、SF大作に初挑戦！黒沢作品は難解さが特徴だが、タイトルからして本作も難解そう。さあ、ハリウッドで続々と誕生するSF大作と比べた黒沢SFの特異性は・・・？

本作に見る「宇宙人」の姿カタチは人間と同じ。しかし、この宇宙人は地球人から次々と「なるほど。それ、もらうよ」と言いながら「概念」を奪っていくからやっかいだ。

しかして、夫を宇宙人に奪われた若妻、宇宙人の取材のためガイドとなるジャーナリストを中心として展開する摩訶不思議な黒沢SFの世界を堪能し、最後には「愛は奪うことができるの？」という、キリスト教の奥義にも迫りたい。

あなたにとって、一番大切なものは何ですか？そんな問いかけに対する、あなたの答えは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■日本の巨匠・黒沢清監督がSF大作に初挑戦！■□■

黒澤明監督は日本を代表する巨匠だが、「ホラー映画作家」というイメージが強い1955年生まれの黒沢清監督も、今や「日本の巨匠」と呼ばれる地位についている。彼の近時の『岸辺の旅』（15年）は「生者と死者の共存」という難しいテーマだったし（『シネマルーム37』247頁参照）、『クリーピー 偽りの隣人』（16年）も難解な映画だった（『シネマルーム38』84頁参照）。さらに、フランスを舞台とし、フランス人俳優、全編フランス語でホラーラブロマンスに初挑戦した『ダグレオタイプ』の女』（16年）も生者と死者の境目が不明な難解な物語だった（『シネマルーム39』未掲載）。このように難解な作品

が多い黒沢清監督が、本作ではSF大作に初挑戦!!

もともと、本作は脚本こそ自分で書いているが、原作は劇団イキウメの同名の舞台劇で、演出・脚本家の前川知大が小説にしたもの。近時、ハリウッドでは『ゼロ・グラビティ』(13年)、『シネマルーム32』(16頁参照)、『インターステラー』(14年)、『シネマルーム35』(15頁参照)、『オデッセイ』(15年)、『シネマルーム37』(34頁参照)等のSF大作が相次いでいるが、それらの出来はさまざま。たとえば、『パッセンジャー』(16年)、『シネマルーム39』未掲載)は大きく期待外れだったのに対し、同じような設定の『スターシップ9』(16年)は上出来だった。また、園子温監督が20代の頃に書いた脚本を映画化した『ひそひそ星』(16年)を発表したが、これは期待を大きく裏切るものだった(『シネマルーム38』未掲載)。

新聞紙評によると、黒沢監督は、「いつかSF映画を撮ろうと構想してきました。ようやく満足できる作品が撮れた」と語っているが、そもそも『散歩する侵略者』というタイトルからして難解そう。さて、日本の巨匠・黒沢清監督が初のSF映画に挑戦した本作のテーマは?その出来は?

■□■先遣隊3人の宇宙人の姿は?その役割は?■□■

ハリウッドのSF大作『メッセージ』(16年)では、宇宙(人)との交信にジェレミー・レナー扮するイアン・ドネリー博士が大きな役割を果たしたが、もし宇宙人が存在しており、戦争か平和かは別として、彼らが地球への「進出」を考えるなら、何より大切なのは、いかに地球人と「交信」するかということ。日中、日韓の間でさえ容易に「交信」できず、南北朝鮮では、同じ朝鮮人同士でも「交信」できないのだから、宇宙人と地球人との交信が難しいのは当然。私が小学生の頃に読んだSF小説では、宇宙人は頭が小さく足がチョー長い、ロボットのような形状と相場が決まっていたが、本作の宇宙人はそうではなく、ヤドカリのように地球人に乗り移るものらしい。

そのため、本作冒頭のストーリーでは、女子高生・立花あきら(恒松祐里)と彼女が縁日の金魚すくいでもゲットした金魚をめぐって、少し気味悪い風景が登場する中、一家惨殺事件が発生し、あきら1人だけが取り残されることになる。それをジャーナリストとして取材するのが桜井(長谷川博己)だ。そしてまた、桜井と同じように、あきらの家を見つめる若者・天野(高杉真宙)がいたが、天野は桜井に対して「僕は宇宙人」と自己紹介し、「地球を侵略するため先遣隊としてやってきた、自分たちの仕事は人間特有の概念を奪い、収集すること」だと説明。そりゃ、一体何のこと?

当初、桜井は天野の言うことをハナから馬鹿にしていたが、どうも、あきらは宇宙人の仲間らしい。そして、話をよくよく聞いてみると、たしかに天野は人間離れしているものの、狂人ではなさそうだし、あながち嘘八百でもなさそうだ。「これはひょっとして特ダネになるかも・・・」と考えた桜井が、天野の「僕のガイドになってくれないか」との頼み

をOKしたことによって、映画は一挙にSF的な展開に・・・。

■□■ホントの主演は真治と鳴海夫妻だが・・・■□■

本作は巨匠・黒沢清監督作品だから、出演者は豪華。しかして、本作のホントの主演になるのは松田龍平扮する加瀬真治と長澤まさみ扮する鳴海の加瀬夫妻だ。3日前から行方不明になっていた夫・真治が警察に保護されたとの連絡を受けた鳴海が駆けつけてみると、たしかに目の前にいる男の姿かたちは真治。しかし。鳴海の顔を見るなり「あなたのこと知っています。加瀬鳴海さんですよ」と語りかけてくる真治は明らかにヘン。何らかの精神疾患を患っているようで、しばらく様子を見ることになったが、真治の説明によると、彼は3日間散歩をしていたらしい。

松田龍平は、『探偵はBARにいる』（11年）（『シネマルーム27』54頁参照）や、『探偵はBARにいる2 ススキノ大交差点』（『シネマルーム31』232頁参照）でもとぼけた味が持ち味だったが、本作にもその演技をトコトン持ち込み、ヤドカリのように宇宙人に寄生された能天気な男・加瀬真治役を演じ切っている。真治との夫婦関係はもともと冷め切っていたから、鳴海はこれを機会に離婚してもいいのだが、それまでは亭主閑白で、「真ちゃん」と呼ばれることを嫌っていた真治が、今はそれを素直に受け入れているばかりか、言動に不安な点はあるものの、それさえ除けばやさしくて無邪気な笑顔を見せるようになった今の真治はそれなりに魅力的。

他方、AKB48のセンターを務めた歌手・前田敦子は、『もらとりあむタマ子』（13年）（『シネマルーム32』125頁参照）や『Seventh Code（セブンスコード）』（13年）（『シネマルーム32』未掲載）等で女優としても大成長しているが、本作では鳴海の妹役として、真治から「家族」という概念を奪われてしまう女の子・明日美役に徹しているので、これにも注目！

■□■概念を奪うとは？奪われた概念とは？■□■

地球への侵略を目指す宇宙人の先遣隊がまず目指しているのは、地球人の言葉の中に含まれている「概念」を奪うこと。したがって、本作を理解するためには、「概念」を奪うとは？、「奪われた概念」とは？、を理解する必要がある。語学をマスターするには、単語を覚え、文法を理解する必要があるが、難しいのは、それぞれの言葉に含まれている概念を理解すること。鉛筆や消しゴム、ごはんやコーヒー等の簡単な概念なら理解は容易だが、戦争と平和、侵略と防衛等々、抽象的な概念を理解するのは難しい。

しかして、地球上に突如現れた宇宙人の先遣隊である真治、天野、あきらたち3人の当面の任務は、地球人からさまざまな概念を奪い、自分のものにしていくこと。あきらたち宇宙人は、これは重要だと考えた概念について、「なるほど。それ、もらうよ」と言っても簡単に地球人からそれを奪っていったが、その概念を奪われてしまうと地球人はどう

なるの？本作には、「家族」の概念を奪われる鳴海の妹の明日美の他、「仕事」の概念を奪われる鳴海の上司・鈴木社長（光石研）、「所有」の概念を奪われる引きこもりの青年・丸尾（満島真之介）、「自分」の概念を奪われる刑事の車田（児嶋一哉）等が登場するので、それに注目！

しかし、概念を奪うのは意外に難しい。本作を観ていると、そのことを実感させられるので、本作中盤ではそのことをしっかり確認したい。

■□■国の対策は？こんな役人で大丈夫？■□■

9月19日に国連総会の一般討論演説で、日本人拉致を含めた北朝鮮の暴挙を非難し国際社会の結束を訴えたトランプ大統領に続いて、9月20日には、安倍首相が北朝鮮問題に異例の時間を割いて演説を行った。現在の世界的注目は北朝鮮の核とミサイル問題だが、宇宙人の出現という緊急かつ非常事態に対して国の機関として動いているのは、本作を観ている限り、厚生労働省の役人品川（笹野高史）だけ。しかも、その行動は秘密裏のようだ。もちろん、それは一般国民に不安と動揺を与えないためだが、宇宙人による地球への侵略という大変な事態に対して、こんな対応で大丈夫なの？

そんな心配をしながら観ていると、品川はひそかに桜井に近づいていったから、政府はしっかり桜井が宇宙人と接触中という情報を把握しているようだ。本作に見る厚生労働省の役人、品川は一見高級官僚と現場指揮官の両役を担う「キレモノ」のようだが、さてそのホントの能力は・・・？

本作の鑑賞については、今日に至るまでの北朝鮮への政府の対応とも対比しながら、日本国のあるべき対策についてもじっくり考えたい。

■□■愛とは？その概念は？愛は奪うことはできるの？■□■

キリスト教最大のキーワードは愛。そして、キリスト教では、愛は奪うものではなく与えるもの。そのことがどこまでわかっているかは別として、キリスト教のそんな教えが結婚式の儀式によくマッチするため、近時は日本でも神父サマの前で愛を誓うチャペル方式の結婚式が花盛りになっている。しかし、「愛は奪うものではなく、与えるもの」という、キリストの教えは、「言うは易く、行うは難い」ものだ。

本作で鳴海役を演じた長澤まさみは、何といても第28回日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞した行定勲監督の『世界の中心で、愛をさけぶ』（04年）（『シネマルーム4』122頁）と、第30回日本アカデミー賞優秀主演女優賞を受賞した土井裕泰監督の『涙そうそう』（06年）（『シネマルーム12』196頁）の2本が代表作だが、今や日本を代表する正統派美人女優に成長しているそんな長澤まさみが本作では本来の美女振りを封印し、宇宙人になってしまった夫真治にトコトン振り回され、イライラさせられっぱなしの鳴海役にトコトン徹している。真治が数日間行方不明になる前の夫婦仲は最悪。したがっ

て、奇妙な発言と奇妙な行動をしながら戻ってきた真治を見て、鳴海はすぐに離婚しても良さそうなものだが、鳴海はそうしなかったばかりか、逆にその後少しずつ真治を愛し始めていくから、長澤まさみが演ずるその微妙な変化に注目！本作後半では、鳴海にも真治は宇宙人らしいということがわかっている。そしてまた、夫の真治の身体に乗り移った宇宙人は人類からさまざまな「概念」を奪い、それによって地球への侵略者になろうとしていることもわかっている。したがって、そんな真治と一緒に行動することは、地球人として如何なもの？鳴海にはそういう考えもあったはずだが、結果的には真治にべったり寄り添う行動をとっていくので、そこでも長澤まさみの微妙な演技に注目したい。

しかして、本作のクライマックスは桜井と自衛隊機との「ドンパチ」ではなく、鳴海が真治に対して「愛を奪って！」と語りかけるシーンになってくるので、それに注目！もちろん、それまで真治には愛と言う概念は全くわからなかったが、鳴海が真治に対して持っている愛の概念とは一体どんなものだったの？そして、それを奪うとはどういうこと？さらに、それは奪うもの？そして、奪うことができるもの？

ちなみに、本作のチラシには、次のとおり書かれているが、さて、これをしっかり理解できる人はどれくらいいるのだろうか？

「なるほど。それ、もらうよ」

《家族》《仕事》《所有》《自分》彼らは私たちの大切な《概念》を奪っていく。

侵略者たちは会話をした相手から、その人が大切にしている《概念》を奪っていく。そして奪われた人からは、その《概念》は永遠に失われてしまう。「家族」「仕事」「所有」「自分」・・・次々と「失われる」ことで世界は静かに終りに向かいます。もし愛する人が侵略者に乗っ取られてしまったら。もし《概念》が奪われてしまったら。あなたにとって一番大切なものは何ですか？

2017（平成29）年9月22日記